

東洋史研究

第三十七卷第一號 昭和五十三年六月 發行

モンゴル帝國の原像

——チンギス・カンの一族分封をめぐって——

杉山正明

はじめに

一 分封なるもの

二 分封の時期

三 分民の内容

四 諸弟の分封地

五 諸子の分封地

まとめ

はじめに

1 十三世紀初頭、モンゴリアを征服したチンギス・カン *Činggis qan* は、麾下の全遊牧民を總計九十五の千戸集團に再編成し、その一部を「黄金の氏族」*Altan uruγ* と稱するおのが一族に分與した。長子ジュチ *Joci*、次子チャガタイ *Čaγatai*、第三子ウゲデイ *Ugoderi*、諸皇子は、カン自身が統べる「中央ウルス」*Qol-un ulus* の西方に、次弟ジュチ・

カサル Jöci-Qasar、第三カチウン Qaciun (分封當時、彼はすでに他界していた) の嗣子アルチダイ Alcidai、末弟テムゲ・オッチギン Temüge-Očigin、諸皇弟は東方に、それぞれ若干の千戸群を與えられて、ウルス ulus を形成した。周知のとおり、これらの人物を創祖とする一族諸ウルスは、以後のモンゴルの爆発的な膨張・擴大の一翼を擔いながら、大カアン qa'an の統令下に一箇の巨大な政治的連合體を構成することになる。いわゆるモンゴル帝國なるものは、こうしたチンギス・カン一族による分有支配の總體にはかならず、その淵源は草創期の一族分封に溯る。

このチンギス・カンの一族分封・遊牧ウルスの形成については、古くウラジミルツォフ、或いはわが箭内互博士をはじめとして、過去幾人かの先學が研究されており、通史・概説書などの類をも含めれば、論及は内外かなりの數にのぼる。①しかし窺い知る限りでは、分封の時期をはじめ、賜與された部民の數、遊牧地の所在、などといった具體的内容にいたるまで、實は多く未解決のままであり、肝心の受封者の顔觸れでさえ、研究者によってまちまちで定かとはいいがたい。モンゴル帝國史の展開上、いわば出發點に位置するであろうこの基礎的問題に關して、いまだ確たる定論はない、と言つてよいと思われる。

小稿では、チンギス・カンの一族分封をめぐる一連の問題を出来る限りトータルな形で検討し、筆者なりの見解を呈示してみた。なお、論をすすめるにあたり、注意したいのは、次の問題である。

分封後誕生した、かの數箇のウルスのうち、弟たちは東方に、子どもたちは西方に配置された。そのため、以後それに因んで、前者は「左翼」*Jeju yar*、すなわち東方の諸王、後者は「右翼」*Baraun yar*、すなわち西方の諸王、と並び稱せられた。ところが、従来東方の諸弟ウルスの存在は研究者の關心を喚起することが少なく、帝國史の展開を語るさいにも、もっぱら西方の諸子ウルスのみに重きが置かれるのが常であった。②

しかし、こうした兩者の甚しい落差は、どれほど事實を反映しているものであろうか。もし、あまりにも西方諸子ウルスのみに力點が傾いた従來のあり方が、いくらかでも把え直されるものならば、我々のイメージのなかにあるモンゴル帝

國の姿も、おのずから別の相貌を帯びて立ちあらわれてくることであろう。

果たして、東方の諸弟ウルスは本源的に西方の諸子ウルスよりも劣位にあったのだろうか。またもし、兩者の間に事實、落差があったとするならば、それは如何なるものであり、また何に由來するのか。——それらに答えるためには、モングルの國家草創の時、つまりチンギス・カンの一族分封、にまで溯って、左右兩翼ウルスが如何なる立場・力關係にあったのか探っていかねばなるまい。それはまた、モンゴル帝國の原點を求めることにもなるであろう。

一 分封なるもの

從來、分封はどう扱えられているか。もとより、定論はないのだが、ここでは、分封の経緯のあらましと問題點の呈示とを兼ねて、便宜上、もっとも代表的な見解とおぼしき佐口透氏の所説に據りつつ、從來の見解のおおよそを筆者なりに纏めてみると、次のようである。

西曆一二〇六年春、オノン河畔に即位の式を舉げたチンギス・カンは、まず新王國の政治・社會・軍事の基盤となる軍事行政組織、いわゆる千戸制を樹立した。ついで、彼自身の絶対權力の據りどころとなる宮廷機構キョウテイキコウの整備に努め、彼と麾下の領袖たちとの結びつきを人的に具現化した親衛隊組織、いわゆるケンクテイ *Khenkhai* を設置した。かくて、誕生間もないモンゴル遊牧國家の基礎をすえたのち、一族の分封に着手した。おそらく、それは一二一一年に始まる金國への大侵入に先立つ時期のことで、諸子弟および生母ホエルン *Hoelun* に對し、それぞれ一箇から數箇の千戸集團から成る遊牧部民を分與した。また遊牧所領地として、王國の中心的政治基地と見做されるモンゴリア本土を除く、周邊の草原地帯を彼等に授けた。ここに、カンが直轄する中央ウルスとは一應別箇の、一族おのおのが個別的に支配する、いわゆるウルスが誕生することになった。ただこの時、遊牧地の分配は、チンギス・カンの四人の弟たち、すなわち同母弟カサル、カチウン、オッチギン、異母弟ベルグテイ *Belgütei* に對してのみおこなわれ、彼等はオノン・ケルレン兩河地帯から東モ

ンゴリア一帯にかけて配置された。一方、四人の子には部民の賜與のみおこなわれ、遊牧地の分配は實施されなかった。何故なら、末子トウルイ「Tolui」を除く、のこりの三人の子の所領は、やがて舉行さるべき遠征の結果、新たに王國の版圖に加わるであらうトルキスタン以西の地において、あてがわれることになっていたのである。彼等三子のウルスは一二一—一二四年の西域遠征の過程にしたがつて、形成されていったのである——。

さて、右では直接言及しなかったが、これにはなお幾つかの確定しがたい問題點、つまり分封の實施はいつか定かでない、見方によって數種の可能性があり得ること、受封者の顔觸れが、或いは四弟・四子といい、或いは四弟・三子といひ、はなはだ曖昧であること、などが含まれていることに留意されたい。

しかし、それらはひとまずさておき、今もつとも問題としたいのは、遊牧ウルスの形成において、最大の眼目であるべき遊牧部民の分與と遊牧地の設定とが、右では別箇に扱われていることである。本來、この二つは、兩者そろってはじめて意味をもつ、一對のものである。果たして切り離し得るものかどうか。もしかりに右に従つて、分民においては諸子弟全て同時であつたが、分地においては諸子のみ後回しにされたとしよう。諸弟の場合はいよいよ。問題は諸子の場合である。彼等は、分民後、配屬された遊牧部民をかかえこんで、分地までの數年間、確たる遊牧地をもたぬまま、他の諸集團のあいだをさすらつていたことになつてしまふであらう。

しかし、こうした事態は實際上、ほとんどありうべくもなかつたはずである。確かに、遊牧生活を営む上で、土地は定着農耕社會がもつような第一義の意味をもたない。従つて、當然のことながら、ウルス形成上でも土地的側面のもつ意義は、人的側面にくらべて遙かに小さく、希薄であつたろう——事實、「ウルス」という言葉それ自體、本來人々の集團を指しているように。しかし、とはいふものの、なお、遊牧地の裏附けを全くもたない遊牧集團というものも、また考えられはしないのも事實なのである。遊牧生活といへども、土地から絶縁しては成り立たない。冬には、積雪の少ない比較的溫暖な山の南麓や河谷に一定の越冬キャンプ（冬營地。いわゆるキシヌラク qishlak）を設營して冬を凌ぎ、夏には、廣々と

した草原（夏營地。いわゆるヤイラク *Yai-lak*）に散開し、家畜を放つて牧畜生産に携わる。遊牧集團にはそれぞれ固有の、こうした冬營地・夏營地があり、その間の移動経路もほほ一定しているのが普通である。

ところで、モンゴリア周辺には、良好な牧地はそう多くない。肥沃な牧地の領有支配をめぐって、古來より、この高原に興亡した遊牧諸勢力のあいだで、幾多の激闘が繰りかえされたのは、周知のことである。時に、モンゴリアに割據する部族集團間の角逐状態を平定して、いまや新秩序を打ち立てんとしていたチンギス・カンであった。その彼にとつて、麾下の全遊牧集團に對し、おおよその遊牧移動圏（ヌトゥク *nutuk*、或いはノントク *nohtok*）を指定し、牧地の所有・使用をめぐる確執を未然に防止することは、國造りの要諦であつたはずである。それはまた、當然彼に期待され、課せられた責務でもあつたであらう。すでにこの一族分封に先立つて、千戸制を根幹とする遊牧國家の骨組みをあらかたつくりおえていた、ほかならぬその彼が、仕上げ作業にあたる一族分封にさいして、たとえそれが一時期にすぎないこととはいえ、遊牧地をもたない、いわば根無し草の如き存在を自らの手でつくり出すであらうか。一族分封を、千戸集團の編成に始まる一連の施策と同一線上において把らえようとする限り、諸子の場合も諸弟の場合と同様、分民に並行して分地もおこなわれた、と考えるほうが自然であり、無理なく理解できるように思われるのだが。

諸子の分封に關して、従來前述のような見解がとられてきたのは、もとより理由がなかつたわけではない。普通、ジュチ・ウルス、チャガタイ・ウルス、ウゲデイ・ウルスの所領といえは、誰しも連想するのは、イルティシヌ河以西くキプチャク草原、イリ谿谷くマー・ワラー・アンナフル、エミル河流域、といった地域である。これらの廣大な地域は、今問題としているチンギス・カン時代の初期においては、いまだモンゴルの版圖の彼方であつて、モンゴルの支配が及ぶようになるのは、一二一九年から始まる西域遠征以降のことだからである。諸子の所領地を右の方面にのみ固定してしまふならば、結局、従來の如き見解に落ち着いてしまうのも、またやむを得ないものかも知れない。しかし、分民・分地を切り離すという苦しい解釋をあえてしてまで、右の諸地域にとらわれる必要はあるまい。西征以前における諸子の分封そのも

のを否定する材料はないのだから。

要するに、諸子については、著名な前述の諸地域とはおのずから別箇の「初封地」があった、ということになるわけである。そこで、その所在を尋ね出し、この豫想を裏付ける必要があるが、この検討はひとまず後にあずけて、今はただ、一族分封を考える前提として、諸子・諸弟いずれの場合も分地・分民は同時であった、とだけ定めておきたい。

二分封の時期

分封はいつおこなわれたのか。一應のめやすとしては、チンギス・カンが即位した一二〇六年あたりか、或いは一二一年から始まる金國遠征のころ、または一二一九—二四年の西域遠征の直前か直後、といったところであろう。しかし、どの文献にも明確な年次は示されておらず、これといった確かな決め手は見當らない。従って、断定はしかねるのだが、かつて佐口氏が指摘したように、

チンギス・カハンには聖旨を下され、「母上にも王子たちにも、弟らにも國民を分かちてやろうぞ」^⑤

とした時期は、ほぼ一二〇七—一一年のことと考えてあやまりないようである。

『元朝秘史』によれば「兎の年」、すなわち一二〇七年丁卯のこと、チンギス・カンは長子ジュチを遣して、當時王国の北陲、バイカル湖西方にあって蠢動していたオイラト、キルギズなどの森林狩獵民を討たしめ、後顧の憂いなきを期した。『秘史』では、この記事の直後に、右に引いた一節に始まる一族への分民のくだりが語られている。チンギス・カンの即位が一二〇六年、その後、千戸集團の編成が、ひとしきり續いたとして、『秘史』が分封を一二〇七年以降に置いているのはうなずける。

次に下限一二二一年について。現行『元朝秘史』十二巻本のうち、正集十巻は、分民の記事につづいて、シャーマン、テブ・テンゲリ Teb-Tengeri の有名な叛逆未遂事件——チンギス・カンが神聖の權威を完全に屈服させ、モンゴル部

内における自己の政治権力を最終的に確固たるものにした事件。即位以來つづいた内治の時期も、これをもってひとまず終了する——を語って完結する。續集二巻に入ると、全く趣きが變り、周邊地域への怒濤の如き進撃の數々が矢継ぎ早に語られる。その劈頭の遠征行が金國遠征で、この時モンゴル軍が漠北を旅立ったのは、「羊の年」(辛未)、一二一一年春三月のことであった。

連年四次にわたるこの遠征には、新興モンゴル王國のほとんど全勢力が参加し、本格的軍事行動となった第二次・第三次の侵入では、ほぼ華北全域を蹂躪した。そのさい、全モンゴル軍は次の如く、三つの軍團にわかれていた——チンギス・カンおよび末子トゥルイは中央軍團を率い、それをはさんで、東にカサル以下の諸弟を主軸とする左翼軍團、西にジュチ・チャガタイ・ウゲデイ三子が共同指揮する右翼軍團という具合に。遊牧國家というものが、本質的に戦争——ないし戦争による戦利品の獲得——を最大の存立基盤としている以上、その國家體制とは、つきつめれば、軍事組織である。とりわけ、こうした國を擧げておこなう軍事行動の場合、その軍隊編成にこそ、端的に國家の枠組みはあらわれるものであろう。右に見た左翼・中央・右翼という大區分は、戦時・平時を問わず、常にモンゴル遊牧國家の基本的な枠組みとなるもので、以後もずっと踏襲されている。カン||中央、諸弟||左翼、諸子||右翼という構圖が見事に示されている以上、金國遠征に突出する一二一一年以前、すでに分封事業は完了していたと見てさしつかえないであろう。つまり、分封の實施は、上限が一二〇七年、下限は一二一一年春、その間ほぼ三年間のいづれかの年、となるわけである。

三分民の内容

諸子弟および生母ホエルンに對する部民の分與については、『秘史』とラシード・ウッディーン Rashid ud-Din の『集史』 Jamī' ut-Tavarikh とに詳細な記載が見える。その内容を表に示す〔表1〕^①。

なお、『秘史』が一二〇七—一二一一年の分民を直接敘述しているのに對して、ラシードの『集史』はチンギス・カン崩御

〔表1〕 分民内容

	秘	史	集	史	
母	母・鞆揚赤斤		10,000	オッチギン	5,000
	17. 古出 19. 齡兒合孫	18. 闊闕出 33. 種賽		オルン・エケ	3,000
	合撒兒		4,000	ジュチ・カサルの三子	1,000
	44. 者卜客		1,400	イエグ, トク, イェスンゲ	
弟	阿勒赤歹		2,000	アルチダイ	3,000
	58. 察兀兒孩				
	別勒古臺		1,500		
		合計	14,900	合計	12,000
子	拙赤		9,000	ジュチ	4,000
	7. 忽難 50. 客帖	39. 蒙客兀兒			
	察阿歹		8,000	チャガタイ	4,000
	29. 合喇察兒 66. 亦多忽歹	37. 蒙客 30. 闊客朔思			
	斡歌歹		5,000	ウゲデイ	4,000
	5. 亦魯格	11. 迭該			
	拖雷		5,000		
23. 哲歹	35. 巴剌				
			クルゲン	4,000	
		合計	27,000	合計	16,000

〔* 秘史の項で、番號（千戸長順位）を附している人物は、「王傳」に任命されたというものたちである。〕

（二二七年）のち、一族諸子弟に傳えられた軍隊の記述であって、時間的に、明らかに『秘史』の記載内容が『集史』のそれに先行することは注意を要する。

ところが、表から明らかのように、「兩史料の傳えるところには、かなり大きな食い違いが見られる。例えば、異母弟ベルグテイは、『秘史』にあつて、『集史』に見えず、逆に庶子クルゲン Kōigen は『集史』にあつて、『秘史』に見えない。また、末子トゥルイは、『集史』によれば、チンギス・カンの軍隊、總勢一二九、〇〇〇人（一二九の千人隊 Hazara の意。以下同様）の

うち、諸子弟への分與分二八、〇〇〇人を除く、一〇一、〇〇〇人を父の遺産として繼承したというが、『秘史』では他の諸子弟と同列に扱われ、五、〇〇〇〇の部民を與えられたことになっている。のこる三弟・三子と母ホエルンとは、どちらの史料にもその名が見出せるものの、分民の數はかなり喰ひ違っている。

近年、『秘史』の史料價値、なかならず年代記としての側面に對して疑念が提出されているとはいへ、ともかくこの兩史料はいずれも分民の詳細を傳える根本史料である。兩者の記載を適宜取捨するという態度は當然慎しむべきとしても、このへだたりは輕々に判斷を下し得る性格のものではない。しかし、『秘史』の記述には、或る種の作爲がかなり濃厚に認められるのに對して、『集史』のそれは、前後の事情によく符合する。

例えば、まずトゥルイである。末子の彼は父チンギス・カンの在世中は常にその許にあつて父を輔け、チンギスが歿すると、末子が亡父の遺した家産——家督ではない——を相續するというモンゴルの舊慣にもとづいて、父の遺領を引き継いだ。『秘史』が、チンギス・カン生前の分民に彼の名を列ねるのは、もとより不自然である。

次に異母弟ベルグテイの場合。『秘史』によれば、ベルグテイは他の諸子弟と同格に、一、五〇〇〇の部民を分與されたという。一方、『集史』では諸子弟への軍隊分與の條には見えず、トゥルイが相續したモンゴル基幹部隊のうち、左翼軍の第十六番目に千戸長の一人として記されているに過ぎない。從來の諸家の説を見ると、ベルグテイについては『秘史』に従つて分封對象者の一人に數え、何ら異論がないようである。しかし、私は、彼の受封を否定する『集史』の記述のほうに、より首肯すべき點を見出す。そこで、これについて少し詳しく考えてみたい。

ベルグテイの家系を、彼から元末の後裔たちまで洗つてみると、どうやら異母弟である彼の血統は、チンギス・カんと同腹の三人の弟の血統とくらべ、明らかに數等、劣位に置かれていたようで、皇族というよりはむしろ、カアン家に親近する最も忠良な家系、といった印象が強い。また『秘史』に描き出される家祖ベルグテイの姿には、一族内部における、彼および彼の一門の微妙な立場が色濃く影を落している。そうした彼が、國家草創の時、他の同母三弟と同等に「皇弟」

の資格で受封したとは考えにくいのである。今ここで縷述しないが、ベルグテイの分封が實現したのは實は、チンギス・カンの最晩年、ないしは第二代ウゲデイの治世の極く初期のこと、それも場所はモンゴル本土内ではない、遼西地方の廣寧一帯であったようである。^⑧

また『秘史』みずから、一二〇七—一一年におけるベルグテイのウルス形成がなかつたことを匂わせているふしがある。『秘史』は、分民の際、各受封者に對して部民の分與とあわせて、ウルスの政治顧問ともいふべき「王傳」がそれぞれ若干名ずつ補任されたことをいい、「表一」に示した人物の名をあげる。ところが、ベルグテイに限っては、口を噤んで何も語っていない^⑨。この時、他の受封者に附けられた面々を『集史』などと照合してみると、彼等はおおむね諸子弟に分與された千戸集團のおおの領袖であつたことがわかる。ラシードが傳えるように、ベルグテイ自身が千戸長に過ぎなかつたのであれば、もとよりこうした王傳、すなわち千戸長が附けられていないのは至極當然のことであろう。

また『秘史』が語る一、五〇〇という部民數も、『集史』が傳える千戸長としての所屬部民と解しても、あながち不適當な數字ではあるまい。いづれにせよ、ラシード『集史』に従つて、チンギス・カン時代、ベルグテイは左翼軍團に所屬する一介の千戸長たるに止つた、と見るのが妥當なところかと思われる。

各人に分與された部民の數についても、兩史料間の逕庭は著しい^⑩。しかし、幾つかの傍證材料から判斷すると、やはりラシード『集史』の記載に信憑性があるようである。

實例を一つ。『元史』卷九五、食貨志歲賜の條には、ウゲデイ時代のいわゆる丙申年の分撥（一二三六年）の分民戸數が事細かに記載されている。これは、金朝覆滅後、その故土「漢地」の戸口約一一〇萬のうち、七六萬戸を一族功臣に分つたもので、その配分數はチンギス・カン時代の保有兵數を基準としていたという。そこに擧げられた數字を『秘史』、『集史』兩史料の分民數とつきあわせてみると、ジュチ・チャガタイ・クルゲンなどの諸子王家およびオッチギンの場合は『集史』の數値のほぼ十倍、カサル、カチウン二王家と當時の大カアン、ウゲデイの長子グユク Güyük (ウゲデイの即位

前の所領を引き継いでいた」とは、特別な恩典が加味されたく、比率が撥ねあがって二〇倍前後、いずれにせよ『集史』の記載との間には一定の相關関係が見られるが、一方『秘史』のそれとは全く相應しない。諸子・諸弟どちらの場合も年齢順に分民数を遞減させる『秘史』の敘述には、どうやら後代の物語りの粉飾が加っているようである。

では、一二〇七—一一年において分封の對象になったのは誰々だったのか。前述のトゥルイ、ベルグティは省くとして、他の人物はどうであろう。

『集史』のみにその名が見える庶子クルゲンは、彼の年齢から推し測ってその分民はチンギス・カンの最晩年のころと見られるから、ここでは除外すべきである。また、母ホエルの名目で分與された部民は、實際上、彼女の末子にあたる末弟テムゲ・オッチギンが繼承したので、實質的にひとつと見てよい。

つまり、分封を受けたのは、結局兩史料とも一致してその名を擧げているカサル、カチウン、オッチギンの三弟、ジュチ、チャガタイ、ウゲデイの三子であって、一族分封によって誕生したウルスは合計六箇であったわけである。この六人の分民内容を、『集史』に従い、あらためて表に示せば、「表2」のようになる。

さて、冒頭に觸れたように、本稿の主要な課題の一つは、東西兩ウルス勢力の力關係を探ることであつた。この表をもとに、兩者を比較しつつ、しばらく考えてみたい。

まず、一つの大きな特徴に氣づく。東方の諸弟三ウルスの部民數と西方の諸子三ウルスのそれとをそれぞれ合計してみると、いずれも一二、〇〇〇となり、全く一致するのである。

勿論、末子トゥルイの龐大な受領分があるので、これを諸子・諸弟という形で對置して論ずることはできない。しかし草創期において、少なくとも東方の諸弟ウルスが西方の諸子ウルスにくらべて決して見劣りする存在ではなかった、と言つてさしつかえないであらう。諸子第六ウルスの創設が、チンギス・カンが即位後矢繼ぎ早におこなつてきた國家體制整備の總仕上げであつたことを想起起こすならば、この左右兩翼ウルスの對等關係は、偶然の一致と見るよりは、むしろ王

〔表 2〕

	集	史	秘史にいう王傳
諸 弟 三 ウ ル ス	テムゲ・オッチギン	5,000	17. 古出 Güü
	{ Kalankqüt-Üranār 部 Yisüt (Besüt?) Jajirāt 族 其他	2,000 1,000	18. 闊闌出 Kököcü
	オルン・エケ	3,000	19. 豁兒台孫 Qorqosun
	{ Qūrlās 族 Ülqūnūt 族		33. 種 賽 Jüstüg?
	アルチダイ	3,000	58. 察兀兒孩 Ča'urqai
	{ Naimān 部 長は、Aq-Sūdai・Ūrjaqāsh Ūryānkqāt 部, Tātār 部		
カサルの三子 Yikū, Tūqū, Yisūnka	1,000	44. 者ト客 Jebke	
合 計	12,000		
諸 子 三 ウ ル ス	ジュチ	4,000	39. 蒙客兀兒 Mönggü'ür
	{ Mūnkkūr Qūnān-Nūyān Hūshitai Baiqū		7. 忽 難 Qunan
	チャガタイ	4,000	50. 客 帖 Kete
	{ Barūlātai-Qārājār Mūka-Nūyān 缺 缺		29. 合喇察兒 Qaracār
	ウゲデイ	4,000	37. 蒙 客 Müge
	{ İlūkai-Nūyān İljikitai Dair 缺		66. 亦多忽歹 30. 闊客朔思
合 計	12,000		

〔*なお、ラシードにいう千戸長と、秘史の王傳とは一致する者もあるが、矛盾する者、不明な者もかなり多い。検討を要する問題である。〕

國の東西兩面の力の均衡を考えた周到な政治的配慮の所産であつたと見做すべきであろうか。

ただ、各ウルスの規模について見た場合、兩者は全く對照的である。右翼諸子三ウルスは等し並に四、〇〇ずつであるが、左翼諸弟三ウルスは大小まちまち不揃いである。ことに、末弟オッチギンは、所屬部民八、〇〇〇とす

ぬけて大きく、全ウルス中、最大規模である。配屬された王傳も四名と最も多い。その威容は、同じく東方に配置された比較的小型のカサル（部衆一、〇〇〇）、カチウン（部衆三、〇〇〇）ニウルスを完全に壓倒し去っている。

かつて箭内互博士はこうしたオッチギンの殊遇に言及し、モンゴルの舊慣である末弟愛重のためばかりではなく、おそらくは来るべき東方経略に備えての布石であったと評されたが、まさしくそのとおりであったろう。

ところで、後年モンケ Mongke・クラビイ Qubilai の即位をめぐって宗室間の紛争が勃發した際、西方の諸子ウルスは直接の當事者となつたこともあつてか、各ウルスはそれぞれ独自の行動をとり、チャガタイ、ウゲデイ兩ウルスなどは四分五裂する。ところが、東方の諸弟ウルスは、これとは全く反對に、若干の例外的人物を除いて、見事なまでに整然とした一體の行動をとり、その政治的發言力をより効果的ならしめた。彼等の結束力は、時代が降つて、クビライの晩年、東方諸弟三ウルス全體が、オッチギンの後裔ナヤン Nayan を盟主に叛旗を翻し、元朝を一大政治危機に陥れた時にも發揮されている。しかも、そのさい注目すべきことは、いずれの場合においても、オッチギン家の歴代當主が東方諸弟ウルス全體の盟主となつていたのである。

そうしたことの背景に、ウルス創設のさい、オッチギンが授かつた大封があつたろうことはほぼ間違いないところである。東方諸弟ウルスの間にみられるまとまりのよさは、西方諸子ウルスと比較した時、著しい特質といふことができようが、そうした傾向性は、一つには、一族分封のにおりに措定された力のバランスのちがいがい——オッチギン家のみ巨大な東方諸弟ウルス、各王家均等の實力をもつ西方諸子ウルス——に起因するかと思われる。

四 諸弟の分封地

分封のもう一つのファクター、分封地について以下、考えたい。まず諸弟の分封地について。

すでに、箭内博士の名篇「元代の東蒙古」に詳細な考證があり、それによると次のようである（一九頁の略圖1参照）。

次弟カサル

興安嶺以西、クレゲル山以南、ハルハ河以北。

第三弟カチウンの嗣子アルチダイ

興安嶺以西、ブヌル・ノール南方、ウルクウイ・カラカルジト流域。

末弟オッチギン

興安嶺以東、洮兒河・嫩江流域。

(なお、箭内博士は、右以外に異母弟ベルグテイの分封地としてオンソ・ケルレン兩河の間の地を擧げているが、前に述べたように、モンゴル王國成立當初の時点における彼の分封は認められないので、省略する。)

管見の及ぶ限りでは、右の考定は今日まで異論なく受け容れられているようである。ところが、カサル、オッチギンの分封地に關して、いささか賛成しがたいところがあり、その如何では、モンゴル帝國における諸子弟ウルの配置に關して、通説とは異なる立場に身を置くことにもなる。半世紀という時をへだてた今、先業をあげつらうのは決して潔しとしないが、敢えてここに再検討を試みてみたい。

まずカサルの分封地について、箭内博士は次のように考證されている。

證補に曰く、……〈中略〉……

Berezin の原譯は「Isunke ヲ Djuchi kazar の家族との分地は、蒙古の地域中、東北面に位し、Argun, Kula-nor 及び xaiiar 等の境に及び、Urdi-noyan の孫にして Tagadjar の子なる Djibu の幕庭ある地に接す」とあれば、ここに所謂分地は Djuchi kazar の子 Isunke の時のものなれども、kassar の分地そのまゝと解して然るべし。さて Argun, xaiiar は共に河名、Kulun-nor は即ち xulanor にて湖名、皆興安嶺西の著名なる地なれば、今更説明を要せず。xaiiar 河の北に Argun 河が入る Gan, Dorbur 兩河の流域は既述の如く Ongirat 部 Alti-noyan の分地にして、Uixui 河流域は kassar の従子 Alchidai の分地なること後に言うが如きを以て、kassar の分地は餘りに狭小なるの感あり、想ふに Bör-nor, kalxa 河の流域も亦彼の所封に外ならざるべし。此くて kassar の分地は北は Alchi-noyan の分地に接し、南は Alchidai の分地に連なり、而して東は興安嶺を隔て、Temüge Oichikin (帖木

格、幹、揚、赤、斤、の、分、地、に、鄰、り、し、な、る、べ、し。⁹⁰

(傍點は筆者)

しかし、私は次の疑問を抱く。第一に、ラシード『集史』によれば、カサルの分封地はいわゆるフルン・ブウル地方を含まない。ところが、博士は「Kassarの分地は餘りに狭小なるの感あり、想ふに Boi-nor, kalxa 河の流域も亦彼の所封に外ならざるべし」(傍點箇所)と判断され、カサルの分封地のなかにつけ加えられた。しかしながら、決して十分な裏附けがあつての修正とは思われない。

第二に、前述のように、カサル・ウルスは僅か一、〇〇〇の部衆を保有するに過ぎない小型ウルスであつて、博士が定められた地域では、あまりにも廣大すぎ、かえつてその分封地たるには、ふさわしくないのではないか、という疑念。

いわゆるフルン・ブウル地方は、廣闊・豊沃、絶好の牧草地帯を形成しており、古來より東モンゴリア方面における遊牧勢力の一大根據地であつた。例えば元明交替期、明軍に追われて北走した元室が遷轉のすえに腰を据えたのがこの地方で、洪武二十一年(一三七八年)藍玉麾下の明軍の急襲をうけて潰滅した時、二元主トグス・テムル Tögüs-Temür のもとには十萬餘の部衆がいたといわれる。その全てが同地方に集住していたわけではないであらうし、多少は割り引かねばならないとしても、相當な收容能力をもつた草原であることは間違いない。

元來が使用する土地の面積に比して生産性の低い遊牧生活のこと、遊牧地は見かけの廣狹よりも、遊牧條件の良悪こそ肝心である。土地の肥瘦という點から眺めれば、箭内博士が「狭小なるの感あり」とされたラシード所傳の地もまた同様
に好適な草原地帯であつて、弱少なカサル・ウルスにはなお十分すぎるほど十分である、とさえ言える。ともかく、フルン・ブウル全域にわたつて、千戸集團一箇にすぎないカサル・ウルスが領有したとは極めて考えにくいのである。

次に、オッチギンの分封地について、次のように考定されている。稍々長文にわたるので、要點のみ引用する。

證補に曰く、……〈中略〉……

15 Berezin の原譯には「彼の國と幕庭とは東北面に位し、蒙古の極端に在りき、隨つて其の方面には、もはや蒙古人の

如何なる他の種族も居らざりき」とあれば、其の分地は興安嶺東に位し、滿蒙接壤地なりしこと、先づ推測せらるべし。

然るに長春真人の西游記によれば、彼は太祖の十六年四月朔、*Kerülen* 河の東南に於いて斡辰大王帳下に達せりといふ。斡辰大王は即ち帖木格斡惕赤斤にして、太祖の征西中、彼が代つて蒙古を監治せしことは、*D'Ohsson* の蒙古史に明文あるのみならず、元史卷一四九耶律留哥傳に「庚辰（十五年）留哥卒、年五十六、妻姚里氏入奏、會帝征西域、皇太弟承制、以姚里氏備虎符、權領其衆者七年」といひ、高麗史卷二二高宗世家に、八年（太祖一六年）八月高麗に來れる蒙古の使者著古與が「傳蒙古皇太弟鈞旨、索獺皮一萬領……」と見え、十一年（太祖一九年）東眞國の高麗に與へたる牒文に「蒙古成吉思老絕域、不知所存、訛赤忻（斡惕赤斤）貪暴不仁、已絕舊好」とあるによりて疑を容れず、隨つて *Kerülen* 河の東南に居りしは蒙古の監國として、臨時に帳殿を此處に設けしに過ぎず、即ち實は *Djuchi-kassar* の分地の南境か、*Alchidai* の分地の北境かに居りしものにして、*Temüje-Ochikin* 自身の分地は決して此の地方にはあらざるなり。然らば彼の分地は如何といふに、そは *Rashid-uddin* の傳ふる所によりて推測せらるゝが如く、實に蒙古の東境より更に蒙古人の住せざる地方に及びしなりき。……〈中略〉……始封の際には單に興安嶺東、滿蒙接壤の地方を分地とし、爾後年を逐うて經略し、殊に乃顔の時に至りて *Sira-nuren* 以北の諸部を蠶食し、嫩江下流域は勿論、吉林以北の松花江流域をも管轄せしものなるべし。^⑥（傍點は筆者）

第一。ラシードでは、確かにオッチギンの分封地に限つて、カサル、カチウンの條に見える「モグーリスタンの内部」という一文が見えない。^⑤なるほどその口吻からは、あたかも獨りオッチギンの分封地のみが東方に突出しているように感じられよう。しかしさりとて直ちにオッチギンの分封地を興安嶺以東の地域にのみ限定してしまうのもまた、早計ではなからうか。三弟の分封地に關するラシード『集史』の記載は、例えばカサル・ウルスの場合、モンケ時代からクビライ時

代の初期にかけて活躍した第三代の當主イエスンゲ Yesingge の頃の状況を敍べているように、クビライ即位（一二六〇年）前後の頃の傳聞にもとづいているらしく、嚴密にいえば、一二〇七—一一年の始封當時の様子を傳えたものではない。この間、およそ五十年、諸弟三ウルス、とりわけその主軸たるオッチギン・ウルスは漸次その勢力を東方へと伸張させていったと考えられるから、『集史』の記載は、當然、ウルス形成以降東方へ擴大した狀況——この場合、興安嶺を東に越えたマンチュリアへの進出——を含んでいる、と見るべきであろう。

第二、『長春真人西遊記』によれば、一二二一年四月、當地を旅していた長春真人邱處機一行は、ケルレン河の東南、フルン・ノール近傍とおぼしき地に至った時、そこに帳幕を構えるオッチギンに行き逢い、これを訪れて歓談した。博士はどういうわけか、オッチギンが當時西域遠征中であったチンギス・カンに代ってモンゴル本土を監國していた事實を縷々述べて、長春一行が出會ったというオッチギンの帳幕は臨時の設置であつて、彼の所領地を意味するものではない、と斷定された。しかしながら、私が見る限り、博士がそこで擧げておられる根據は、いずれもオッチギンの「監國」という事實を物語るものではあつても、決して彼の帳幕が「臨時」の設置であつたことを立證するものではない。臨時の設置とし得ないならば、オッチギン本來の遊牧地内での設置と見るのが妥當なところであろう。『長春真人西遊記』の記事は、むしろ素直に、フルン・ブユル地方がオッチギンの所封地であつたことを物語る、有力な現地報告と考えてよいのではなからうか。

第三、今、かりに博士の考定に従つてみたとしよう。オッチギン・ウルスの場合、分封當初（一二〇七—一二年）から興安嶺以東の地域のみにおいて、八、〇〇〇もの大部衆を擁していたことになるわけである。しかし、果たして、一二一一年春から開始される金國遠征以前の時期において、興安嶺以東のみでこれだけの大集團に見合う廣大な地域がモンゴルの版圖に入っていたであらうか。遺憾ながら、その可能性は極めて少ない。何故なら、同方面が確實にモンゴルの手中に墜ちるのは、早くとも一二一三年から翌一四年にわたる第二次金國侵入において、カサル指揮下の左翼軍團がマンチュリア

中央部以西の地を席卷してよりのちのことと考えられるからである。^②

要するに、博士の考定と筆者の見解との相違は、いわゆるフルン・ブル地方をカサルの所封地に含めるか、或いは餘人——すなわちオッチギン——の所領とするか、の一點にかかっている（略圖1）。結論から先にいえば、このフルン・ブル地方こそ、一族分封のさい、末弟テムゲ・オッチギンがその大部衆とともに封ぜられた遊牧地にほかならないと思われるのである。その根拠を以下に列挙する。

その一。前述したように、『長春真人西遊記』の記事は、一二二一年當時（分封より一〇〜一四年のちになる）、同地方がオッチギンの所領であったことを示す有力な證左である。

その二。今、諸第三ウルスの遊牧地に關するラシード『集史』の記述を、順に並べて俯瞰してみると、三ウルスは興安嶺の山麓に沿って北から、カサル・ウルス、オッチギン・ウルス、カチウン・ウルスの順に展開していたように思われる（繁雜を避けて、引用を省略する。當該註を参照いただきたい）。^③

その三。カサルの分封地について、ラシードは「オッチギン・ノヤンの子ジブゲンとその孫タガチャルの牧地のある地方に近接している」と傳える。^④これを博士の考定に従えば、モンゴリア東部に聳立する大山系——興安嶺を隔てて、カサル・ウルスとオッチギン・ウルスとが鄰り合っている意、と解するほかはない。しかし、それは如何にも奇異である。『集史』の記述を無理なく理解しようとするならば、平坦なフルン・ブル草原の北方、ラシードがカサル・ウルス南面の疆界と傳えるカイラル河あたりにて、兩ウルスが境を接している意、と解するほうが文脈上、自然ではなからうか。

その四。そして、同地方がオッチギン・ウルスの遊牧地であったことを裏付ける何よりの證左は、『元史』卷一三四撒吉思傳に見える次なる一文である。

幹眞薨、長子只不干蚤世、適孫塔察兒幼。庶兄脫迭狂恣、欲廢適自立。撒吉思與火魯和孫、馳白皇后。乃授塔察兒以皇太弟寶、襲爵爲王。撒吉思以功與火魯和孫分治、黑山以南撒吉思理之、其北火魯和孫理之。

箭内説



私見



オッチギンが他界したとき（二四六―四八年と思われる）、彼の長子ジブゲン Jibügen は既に亡く、嫡孫のタガチャル Tacačar ~ Tačar, Toracačar はまだ幼年であった。そのため、家督争いがおこり、傍系のトデ Töde なる人物が篡奪を企てた。そのとき重臣のサルギス Sargis ~ Sirgis（ウイグル名族の出。チンギス・カンからオッチギン・ウルスへと派遣されていた人物。政治顧問といったところか）とコルクソン Qorqosun（モンゴル人に多く見られる名前で、カサル家第二代イェグツ Yegüの子に同名の人物がおり、可能性としては十分に考えられるが、碩學那珂通世博士は、かつて、ここに見える火魯和孫を『秘史』八十八功臣の第十九番目にその名を列ね、一族分封にさいして、王傳の一人としてオッチギンの許に遣された千戸長コルクソンに比定された。②）蓋し卓見であり、これに従いたい。）の二人が、グユク・カン崩後實權を握っていたグユクの皇后オグル・ガイミシュ Oyu Tamiš に直訴した。かくてタガチャルは無事祖父オッチギンの王封を相續することができ、擁立の功臣サルギスとコルクソンの二人は、幼少の主君を輔翼して、「黒山」の南北にわたるオッチギン家の所領を折半して分割管理することになった——というのである。

問題は、文中の「黒山」である。「黒山」なる呼稱が、當時モンゴル人たちによってカラウン・ジドゥン(Qara'un Jidun 哈刺溫只敦「暗き山嶺」の意)と呼ばれていた興安嶺をさすことは、那珂博士以來、ほぼ定説となっている。すると、右の一文はまさしく、オッチギン死亡當時（二四六―四八年?）、オッチギン家の所領が興安嶺の南北にわたっていたことを示すものにほかならないではないか。興安嶺以北（もしくは以西）の地としては、ラシード『集史』において一見空白になっているかに見えたフルン・ブル地方こそ、もっともふさわしいであろう。加えて、右文では「黒山」以北は生粹の遊牧モンゴル人コルクソンが管轄し、以南はウイグル出身政治顧問サルギスが管轄したというのである。「黒山」以北、すなわち興安嶺の北のフルン・ブル地方——その廣闊・豊沃な遊牧草原こそ、オッチギン家にとって始封以來の遊牧所領地であったらうことは、もはや容易に想像されるところであらう。

フルン・ブル地方が、カサルの分封地ではなく、實はオッチギンの分封地であったことはほぼ疑いない、と思われ

る。そこで、あらためて諸弟の分封地を整理してみると、次のようになる。

次弟カサル——興安嶺以西。アルグン、カイラル兩河、およびクルン山によって圍繞される地

域。

第三弟カチウンの嗣子アルチダイ——興安嶺以西。ブウル・ノール南方、ウルクウイ・カラカルジト流域。

末弟テムゲ・オッチギン——興安嶺以西(?)。フルン・ブウル地方、ハルハ河流域。

一族分封||ウルスの創設にあたって、諸弟三ウルスは、モンゴリアの東方、興安嶺の西麓一帯に連鎖的に形成されたわけである。ただし、右は飽くまで分封當初の状況で、その後の東方経略の進展にともない、各ウルス、とりわけオッチギン・ウルスの勢力が興安嶺を越えてマンチュリアへと伸びていったの言うまでもない。

五 諸子の分封地

先ほど、分民・分地は同時であるとの観点から、諸子の分封地設定を諸弟のそれより後年であるとする従來の見解に疑問を提出し、一二〇七——一一年における諸子の「初封地」の存在が豫想される旨を述べた。以下、順次ジュチ、チャガタイ、ウゲデイ三子の分封地について検討を加えてみたい。

(1) ジュチの分封地

ラシード『集史』ジュチ・ハン紀第二章の冒頭に、ジュチの所領について次のように見える。

チンギス・ハンは、イルディシユ地方とアルタイ諸山とにある全國土 *viayat va ulus*、およびその近鄰の夏營地、冬營地を全てジュチ・ハンに委附した。そして、キプチャク草原の國土とその方面の(すでに)解放された國々を領有するよう、敕令 *yarliq* を發した。ジュチ・ハンの幕營地 *yort* はイルディシユ地方にあり、彼の王國の王座の所

在地 magarr-i sarir もそこにあった……

ジュチはキプチャク草原以西に所領を開拓するようチンギス・カンの命令を受けていたが（右文の中段はそれに相當する）、それを成就しないうちに、一二二七年のはじめ、父チンギス・カンに先立って他界した。従って、ジュチの初封地としては、右文の前半および後段の、王座帳殿があったという、イルティシュ (Erdis, Ra, Irish) 河流域からアルタイ山脈にわたる地域に求められるであろう。

『秘史』によれば、ジュチは「兔の年」（二二〇七年丁卯）、チンギス・カンの命令で「右手の軍」を率いて王國北方の「森の民」の地方へ始めて出征し、オイラト、キルギズなどの諸部族を服屬させ、歸還後恩賞としてそれらの民を與えられた、という。^② 『秘史』ではこの記事の直後に分民の次第が語られていることでもあり（すでに見たように、この討伐行が分封年次の上限を劃するものである）、またラシードの傳えるジュチの分封地、アルタイ・イルティシュ地方は、この遠征で達したイェーセイ河上流地方とは鄰接する地であることから推し測ると、アルタイ・イルティシュ方面へのジュチの分封と、それに先立つ一二〇七年の遠征行とは、或いは何らかの關連があるものかも知れない。

後年、當地を通過したカルピニの報告によれば、一二四六年當時、イルティシュ河流域には、ジュチの長子オルダ Orda が居住しており、そこには彼の「父の本營」があつたという。^③ どうやら、ジュチの初封地は、彼の死後、長子オルダが相續したようで、少なくともグユク時代（一二四六—四八年）までは——この間、ジュチの次子、バトウ Batu を總帥とするロシア・ヨーロッパ遠征が擧行された結果、ジュチ家一門の領域は西方へ巨大な成長を遂げることになるのだが——ジュチ家發祥の地として、一族の長上オルダが創祖ジュチのオルドとともにその舊封を守っていたわけである。

(2) チャガタイの分封地

チャガタイが、イリ谿谷のアルマリク近傍にオルドを置き、それ以西のフェルガーナ盆地、ザラフシャン流域の草原に

部民を遊牧させたことは、周知の事實であるが、ラシード『集史』チャガタイ・ハン紀第二章には次のように見える。

(チンギス・ハンが) 諸軍を賜與した時、チンギス・ハン紀の軍隊分配の條において詳細に述べた如く、四、〇〇〇人を彼に與えた。そして諸將のうちより、バルラス部のカラチャルとジャライル部のイェスン・ノヤンの父ムケを與え、

ナイマン部族の遊牧地 *yurt* であったアルタイ地方の國土 *vilayat va yurt-ha* の一部を與えた。^②

軍隊の分配(分民と同義)と並記されていることより見て、ここにいう舊ナイマン領の「アルタイ地方の國土の一部」が、チャガタイの初封地を意味していることはうたがいを容れない。しかも『集史』は、右文に引きつづき、「羊の年 *qunin* *yal*」(一二二年辛未)の紀年を冠して、金國遠征の次第を語る。^③つまり、右の『集史』の記事は、チャガタイの初封地の存在を伝えるだけでなく、分民・分地の同時實施と分封時期の下限を劃するデットとを一舉に語ってくれる、貴重な記録なのである。ただ残念ながら、記述が簡略すぎるため、チャガタイの初封地は漠然とアルタイ地方とのみ知れるだけで、正確な位置は闡明にしがたい。

なお、ジュヴァイニー *'Alā' ud-Dīn 'Atā-Malik Juvainī* などには、チンギス・カン生前のチャガタイの幕營地として、頻りにイリ谿谷中のクヤース(アルマリク南方)が擧げられているが、イリ地方が確實にモンゴルの支配下に入るのは、一二一八年、部將 *Jebe* 率いるモンゴル軍が當時カラ・キタイの王位を篡奪していたナイマンのグチュルク *Guchuluk* を征討してよりのちのことと思われるので、イリの帳幕は當然それ以降の設営と見なければならず、チャガタイの初封地としては不適當である。ただ、チャガタイのイリ進出が、アルタイ地方の初封地を基點としてなされたであらうことは十分に考えられるところである。

(3) ウゲデイの分封地

ジュヴァイニーはチンギス・カン晩年の諸子弟の所領に觸れて次のようにいう。

後繼者ウゲデイの王庭は、父の治世の間はエミルおよびコバク地方にある彼の幕营地^⑤であつたが、彼は玉座に即くと、ハタイとウイグル地方との間にある根幹の地に移した。そしてその居處を息子グユクに與えた。^⑥

エミル・コバク^⑦地方が、即位前のウゲデイの所領であつたことは、ウゲデイの登臨が實現した一二二九年のクリルタイの際、「ウゲデイはエミルとコバクから」來會したという記事からも裏付けられる。この所領はウゲデイが大カアン位に即いたあと、彼の長子グユクが引き繼ぎ、後年カイドウ^⑧ Qaidu の根據地になるなど、ウゲデイ一門にゆかりの深い土地としてよく知られている。

しかし、問題は同地方が果たしてウゲデイの初封地であつたかどうかである。ところが、エミル・コバク地方がいつモングルの支配下に入ったものか、頗る曖昧なのである。一族分封がおこなわれた一二〇七—一一年前後、同方面は東方のモンゴル、西南方のカラ・キタイ、西方のカルルクなどの間に挟まれ、さらにナイマン覆滅後の混亂も手傳つて混沌たる情勢下にあつた。ジュヴァイニーによれば、一二〇八—一二一年頃、エミル方面にはナイマンの殘存勢力が活動していた形跡も見られ、モンゴルの統治力がどこまで確實に同地方に及んでいたか、極めて疑わしいと言わざるを得ない。もしカラ・キタイの支配下にあつたのなら、モンゴルの領有は、前に述べた一二一八年のジェベによるグチュルク討伐まで俟たねばならない。ともかく、エミル・コバク地方がウゲデイの初封地であり得たかどうかは、否定的印象が強いもの、かといつて他に據るべき材料はなく、斷定は憚られる。

結局、最終的判斷は、同時に設置されたジュチ、チャガタイ兩ウルスとの比較に委ねるほかあるまい。

そこで、纏つてこの兩者を眺めてみると、先に見たとおり、ジュチ、チャガタイの初封地は、どちらもアルタイ方面にあつて、キプチャク草原、イリ谿谷といった、チンギス・カン晩年以降の彼等一門の領域とは一致しなかつた。一二一九—二五年の西域遠征による帝國全體の西方擴大という新事體を間にはさんで、それぞれ西方への進出が見られたのである。

ところで、もし實際にエミル・コバク地方がウゲデイの初封地であったとすれば、彼のウルスに限っては、全く西方へ伸張することはなかったのであろうか。アルタイ山麓のジュチ、チャガタイ兩ウルスにくらべ、エミル・コバク地方であれば、ウゲデイ・ウルスは随分西方に位置することになるのに。

當初、最も西邊に在ったウゲデイ・ウルスが、同等の力量をもつ他の二つのウルスの西方進出をむざむざと手を拱いて傍觀していたとは信じられない。諸子三ウルス相互の位置關係から眺める限り、エミル・コバク地方は分封以後、進出・領有したものと見るほうが妥當ではあるまいか。

そこで、ウゲデイの初封地を新たに求めなければならぬが、先にも觸れた如く、エミル・コバク地方以外の所領を傳える記録は全くない。ただ『長春真人西遊記』に、西域遠征に先立って、行軍の便をはかるため、「三太子」、すなわちウゲデイが兵を出してアルタイ山中の隘路——そのルートは、アルタイ西麓のウルングウ *Urungui* 河畔に通じる——を切り拓いた、という記事が見えること、また一族分封にさいして、諸子三ウルスのうち、ウゲデイ・ウルスのみが孤立する位置に配置されたとは考えにくいこと、さらにチングス・カンの晩年以降、ウゲデイ一門の固有領となる前記のエミル・コバク地方と所在不明の初封地とは、相互の位置關係において、おそらく無縁ではないと想像されること——以上の三點から、私はウゲデイの初封地を、他の二子と同じアルタイ山麓の、ジュチの所領の南面あたり、エミルⅡ後世のタルバガダイ地方を貫いて東西に走るルートがアルタイの高みにぶつかって、そこから山中へわけ入る、ウルングウ河流域周辺に指定したい。

もとより、根據はきわめて薄弱、證據不十分の誇りは免れがたいであろう。しかし、周圍の状況や前後關係から、出来る限り整合的に考えようとする時、右のような結論に到達せざるを得ないのである。

ここで、以上をまとめてみよう。諸子の分封地は、こうなる。

長子ジュチ

アルタイ山麓くイルティシユ河流域。

次子チャガタイ——アルタイ山方面の一地方。

第三子ウゲデイ——アルタイ山麓ウールングウ河流域あたり？

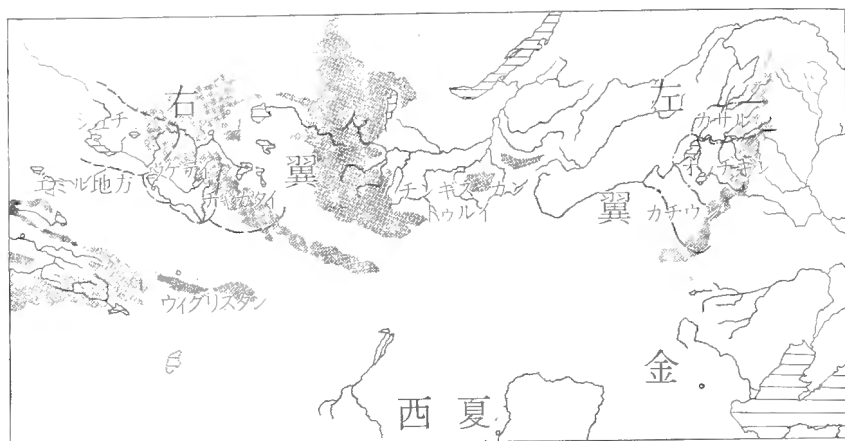
このうち、チャガタイの分封地の正確な所在はわからない。しかし、後年の幕營地^①イリ谿谷との位置關係、或いは「チャガタイはビシュバリック地方で王座に即いた」というラシードの所傳^②などから窺われるチャガタイ家と南方ウイグリスタンとの密接な結びつき、等々から推し測って、諸子三ウルスのうち、最も南方に位置していたかと思われる。イリ、ビシュバリック、そしてアルタイと、右の三つのポイントをつないだ時、そのラインは、丁度、東西交通の主要幹線の一つ——イリ河沿いの谿谷を東方に溯って、一旦トゥルフアン盆地（當時のウイグリストン）に出たあと、天山の東方支脈ボグド・オーラを越えて、ビシュバリック（現今ジムサあたり）からジンガリアの沙漠を縦斷してアルタイ山麓に達し、モンゴリアに入るルート——に重なり合う。名高いチャガタイのイリの幕營は、アルタイ南邊の初封地を基點に、右のルートを西に辿って到達したものかと思われる。

ま と め

さて、これまで述べてきたところを踏まえ、チンギス・カンの一族分封とその結果完成した初期モンゴル王國について、もう一度見直してみたい。

まず、諸子第六ウルスをそれぞれ圖上に据えて、俯瞰してみよう（略圖^③）。すると、東の興安嶺に沿って諸弟の三ウルス、西のアルタイ山に沿って諸子の三ウルス、いずれも南北に連鎖状に繋がっている様子が見て取れるであろう。この二つの大山系は、モンゴリアの東西を劃する自然的境界線であると同時に、成立當初のモンゴル王國にとっては政治的境界線でもあった。つまり、諸弟三ウルスと諸子三ウルスとは、まさしく王國の東西兩邊境に相對して置かれたわけである。

略圖 2



両者の對等關係は、前に述べた分民數の一致からも窺い知れたが、こうした兩者の地理的對照性は一層それを際立たせる。

モンゴル帝國時代、東方の諸弟王家は「左翼諸王」「東道諸王」と呼ばれ、一方西方の諸子王家は「右翼諸王」「西道諸王」と呼ばれて並び稱せられたことは著明な事實であるが、從來これについて、帝國の領域全般より見て、ごくおおまかに振り分けたものに過ぎないと解されてきた。しかし、右から明らかなように、この表現は決してそうした曖昧なものではない。モンゴル國家の誕生期において、東西兩ウルス勢力が實力的にも地理的にも全くパラレルな存在であったことを表わした實質的表現にはかならないのである。

こうしたことから見て、草創期、東方諸弟ウルスが西方諸子ウルスより劣位であることは全くなかった、と判断してもはやかまわぬであろう。兩者の間に落差が生じたと思えば、それは分封以後に齎されたものにはかならない。

ところで「左翼」「右翼」の字面から我々が思い浮べるのは、『元朝祕史』に名高い「左手のカラウン・ジドンに

枕せる萬戸^⑧」「右手のアルタイ山に據れる萬戸^⑨」であろう。『秘史』によれば、一二〇六年チンギス・カンは即位と同時に麾下の全遊牧民を九十五箇の千戸集團に改編し、そのうち、東方興安嶺方面に散開する千戸群、いわゆる「左翼の萬戸」はムカリ *Mugali* に委ね、一方、西方アルタイ山方面の千戸群、いわゆる「右翼の萬戸」はボオルチー *Bo'orču* に委ねた。諸子弟六ウルスの興安嶺、アルタイ山への配置は、全くこれと軌を一にしている。全モンゴル軍團の左右兩翼への展開・配備という雄大な構想のもとに、チンギス・カンの國造りが推進されていったらしいことが推測されよう。

ここに、初期モンゴル王國の全體像がおぼろげながら浮かびあがってくる。すなわち、千戸制の樹立に始まり、一族分封によって一應の完成をみたその國家は、まず王國の東西兩縁に諸子弟の左右兩翼六ウルスが位置し、その間の、チンギス・カンが直轄する「中央ウルス」が、さらに一萬名の近衛軍團 *tumen kešigten* を中心にはさんで、ムカリ所轄の左翼軍、ボオルチュ所轄の右翼軍に分かれる——という仕組みになっていたのである。そして、千戸軍團を根幹とするこれらの各部分が、全てチンギス・カンという遊牧君主一個人を唯一の結び目として有機的に結合する。その意味でこの國家は、原初的なながらも、それだけにまた純粹な、最も見事に仕立てられた遊牧國家であったと言えるであろう。

國造りが完了した直後に舉行された金國遠征では、すでに觸れたように、全モンゴル軍は、諸弟主軸の左翼軍團、チンギス、トゥルイ麾下の中央軍團、諸子共同指揮下の右翼軍團に三分され、經略地域も東方、中央、西方とはっきり分擔が定まっていた。こうした左・中・右の三軍團方式は以後の遠征でもしばしば踏襲され、モンゴル軍の傳統的軍團編成となつた。そのさい、中央軍は大カアン自ら、ないしはそれに準ずる人物が率い、左軍は左翼の諸王・諸將、右軍は右翼の諸王・諸將が、それぞれ指揮するのが一般的であった。この軍團編成、人的配置は、まさに前記の國家構造と符合している。周知のように、モンゴル語では左 *tejen*、右 *baran* は、東、西と同義であつて、モンゴリアに立つて南面した場合、左翼は東方に、右翼は西方に當る。つまり左軍・中軍・右軍というパターンは、モンゴル國家を構成する三つの部分と軍事體制に適用されて、そっくりそのまま南下した形なのである。つまり、モンゴル遊牧國家においては、國家體制と

は、即、軍事體制であり、軍事體制イコール國家體制の變化形、であつたと言えよう。

こうしてみると、諸子弟ウルスの創設は、國家體制整備の一環であると同時に、やがて決行さるべき周邊地域に對する侵略の軍事的基礎づくりとしての意味も兼ねもつていたと言えるであろう。それはまた、次の注目すべき事實からも窺われる。

すなわち諸子弟六ウルスはいずれもモンゴリアを東西に貫いて周邊地域に通ずる主要な交通路の上に乗っており、しかもその出入口を扼する形になっているのである。

想えば、ジュチ・ウルスがキプチャク草原からロシアに至る大版圖を獲得するのも、イルティシユ流域に連結する、いわゆる「草原の道」をひたすら西方に辿つた結果であらうし、またチャガタイ・ウルスがイリ谿谷からマー・ワラー・アンナフルに進出するのも、いわゆる「天山路」を制壓していた當然の歸結であつたと見ることも可能であらう。翻つて東方オッチギン・ウルスのマンチュリアへの擴大にしても、その強盛によるところが大きいとはいへ、興安嶺沿いの南北ルートと、モンゴリア中央部からケルレン河沿いにくだつてきてマンチュリアに至る東西ルートとが交會する要衝、フルン・ブルル地方を占有していたことと無縁ではあるまい。同地をたつて東進すればマンチュリアの嫩江・松花江・洮兒河各流域に出れるほか、カサル・ウルスの境内を經由して、アルグン河沿いに北東進すれば、アムール方面に通じ、またカチウン・ウルスの境内を縦斷して、興安嶺西麓を南進すれば、遼河方面からさらに中國へと到達することができる（この點、カサル・カチウン兩ウルスは、實力的にもそうであつたが、位置關係の上から見ても、巨大なオッチギン・ウルスの「脇侍」的印象を免れたい）。ともかく、こうした主要幹線上への諸子弟ウルスの配備が、すでに對外戰爭を意圖した上での布石であつたことは間違いない、その意味で各ウルスの初封地は前進基地的色彩が濃いとも言えよう。

このモンゴル王國はたびかさなる遠征の成功によつて、一躍大帝國にふくれあがる。しかし、それは、歴大なひろがりをもつ定住地帯という全く別種の要素がつけ加つたのであつて、それを除くと、構造的に見るならば、前述の草創期の原

初形態と基本的に變らなかつたと思われる。例えば、『祕史』は第二代ウゲデイ・カアン踐祚の際（一二二九年）、帝國の各地から參集してきた面々を次のように列擧する。

鼠の年、(1)チャアダイ、バトウ「ら」を頭とせる右手の王子たち、(2)オッチギン・ノヤン、「ジヨチ・カサルの遺子」イェクウ、イエスンゲ「ら」を頭とせる左手の王子たち、(3)トゥルイを頭とせる内地の王子たち、王女たち、萬「戸」の、千「戸」のノヤンたちは、……
 （文中の番號は筆者）

(1)は右翼諸子ウルスの諸王、(2)は左翼諸弟ウルスの諸王、(3)は末子トゥルイ麾下の中央ウルスの各領袖——これこそまさにモンゴル帝國の基本構造であつて、草創期、チンギス・カンによつて措定された枠組みそのままである。

つまり、モンゴル國家が、中央ウルスとそれを取りまく六つの一族ウルスという形で創始された時、そこにはすでにチンギス・カン一族による共同領有の原理が作動していたのである。言い換れば、モンゴル帝國の分有支配體制の淵源は一二〇七——一年の一族分封にあり、その結果できあがつた國家體制こそ、のちのモンゴル帝國——そして恐らくは、十三・四世紀以降のユーラシア史上に興亡する幾多のモンゴルの傳統をひく諸國家——のプロト・タイプとなるものであつた。チンギス・カンによつてつくられたモンゴル國家は、異常なまでの領土擴張とそれに伴つて起きる様々な政治的経緯とによつて、當初の形態から大きな變質・改變を被らざるを得なかつた。しかし、モンゴル政權が遊牧國家としての本質を捨て去らない限り、そしてチンギス・カン一族の血の神聖と彼等による帝國の分有支配という原理が生きつづける限り、この大枠は創祖チンギス・カンの名とともに尊重され、生命を保ちつづけたのである。

行論の性格上、論旨はおおむね蕪雜であり、おおまかな輪郭を描くに止つた。各ウルスの位置、とりわけ西方諸子ウルスのそれについては、より嚴密な檢證作業がなされなければならないし、當初對等であつた東西ウルスに以後、どうして「落差」が生じたのか、ことにその政治的経緯から、探つていく必要もあるであらう。國家構造の變容の問題とともに、

今後、果すべき責めとしたい。大方の御批正をいただければ幸いである。

註

- ① B. Я. Владимирцов: *Общественный строй Монго-лов*, Ленинград, 1934. (外務省調査部譯『蒙古社會制度史』生活社、一九四一年)、箭内互「元代の東蒙古」(『蒙古史研究』刀江書院、一九三〇年所收)、村上正二「チンギス汗帝國成立の過程」(『歴史學研究』第一五四號、一九五一年)など。その他、後註③の佐口氏の論稿を始め、多くの研究のなかで論じられ、また近年盛んに發刊されている各種の歴史シリーズでも觸れられているが、省略する。
- ② ただし、海老澤哲雄「モンゴル帝國の東方三王家に關する諸問題」(『埼玉大學紀要』《教育學部、人文・社會科學》第二一卷、一九七二年)によって、その活動の概要はほぼわかるようになった。
- ③ 佐口透「チャガタイ・ハンとその時代(上)——十三・四世紀トルケスタン史序説として」(『東洋學報』第二九卷第一號、一九四二年)。とくに後半の敘述は、その八二頁に據る。
- ④ 佐口前掲論文、八一—八二頁。
- ⑤ 『元朝秘史』第二四二節(卷一〇)。なお小稿中の譯文は、村上正二譯注『モンゴル秘史——チンギス・カン物語——』三卷(平凡社、一九七〇、七二、七六年)に據った。本處はその3、一〇四—一〇五頁。
- ⑥ 『元史』卷一、太祖本紀。なお、ラシード『集史』、『聖武親征錄』にもほぼ同様の記事がみえる。
- ⑦ 本田實信「チンギス・ハンの千戸——元朝秘史とラシード集史との比較を通じて」(『史學雜誌』第六二卷第八號、一九五三年)に詳しい。【表1】もこれを參考にした。
- ⑧ 吉田順一「元朝秘史の歴史性——その年代記的側面の検討——」(『史觀』第七八卷、一九六八年)。
- ⑨ この立證には、かなり煩瑣な手續きを要する。稿を改めて論じたい。
- ⑩ 『秘史』二四三節(卷一〇)。村上譯注書3、一〇六一—一〇七頁。
- ⑪ 箭内博士は、かつて『秘史』の記載を分民、『集史』のそれを分兵と解し、兩者を別ものとして扱われたが(箭内前掲書、六二—六三〇頁)、遊牧國家において遊牧部民≡軍人であるのは當然のことであって、兩者をことさらに區別するのはおかしい。文獻的に見ても、例えばラシード『集史』ではモンゴル部族軍のことをしばしば *laskar va ulus*、或いは逆に *ulus va laskar* の語で表わす。この「二語を運んで或る一つの概念を表わすやり方は、ペルシア語に常套的な表現方法で、この場合、イラン人の耳にややなじみが薄いウルスという外來語を、實質的に同内容である *laskar* (軍隊の意) というペルシア語にもう一度置き換えて補足しているのである。つまり、モ

ンゴル部民¹¹軍人を示すものにはかならない。

- ⑫ これについて、最近、松田孝一「モンゴルの漢地統治制度——分地分民制度を中心として」(『待兼山論叢』第一一號史學篇、一九七八年)が發表された。氏が示された考定と私の考えとは、おおむね同じである。詳細はそちらを参照いただきたい。

⑬ 箭内前掲書、六二九—六三〇頁。

⑭ 同右、六〇七—六二二頁。

⑮ 同右、六〇九—六一〇頁。

⑯ 『大明實錄』洪武二十一年四月丙辰の條。この間の事情については、和田清「明初の蒙古經略」(『東亞史研究』蒙古篇、東洋文庫、一九五九年所收)に詳しい。

⑰ 箭内前掲書、六一—六二二頁。

⑱ 後註⑳参照。

⑲ このオッチギンの帳幕の位置比定には諸説がある。王國維「長春真人西遊記校注」(『蒙古史料校注四種』所收 上、第二〇葉b)、王汝棠「長春真人西遊記地理箋釋」卷二(『國學叢刊』第五冊、一九四一年、二八頁)など。ただ、フルン・ノール近傍とする点では、おおむね一致している。

⑳ この軍事行動に關しては『秘史』の記事と『元史』太祖本紀・『聖武親征錄』のそれとは一致しない。那珂通世・箭内互の先學がこれを比較検討されているが、箭内説にはやや無理があり、那珂説に従いたい。詳細は那珂通世譯註『成吉思汗實錄』(大日本圖書、一九〇七年)四五八—四五九頁、箭内前掲書六五九—六六一頁参照。

㉑ 三弟の所領に關するラシード『集史』の記述を以下に列挙する。

(1) カサル

イエスンゲ及びジュチ・カサル一族の國土 *yurt va maqam* は、モゴリスタンの内部、その東方の北寄りであって、アルガン、クラ・ノール *Kula-ranūr* (フルン・ノールのこと) 及びカイラルの境界内にあり、オッチギン・ノヤンの子ジブゲンとその孫タガチャルの牧地のある地方に近す。

(Rashid ud-Din Fazl ulah: *Jami' ut-Tawarikh*, ed. by Bahman Karimi, 1338, Tehran, 1959, vol. I, p. 205. 以下、Rashid / Karimi と略す)

(2) オッチギン

彼(オッチギン)の國土 *vilyat va yurt* は東北方にあり、モゴリスタンの極邊 *aqdas* にあたるので、その方面のなたには、モンゴル人の如何なる部族も存在しなかった。(Ibid., p. 208)

(3) カチウン

アルチダイの國土 *ulus va yurt* は、モゴリスタンの内部、東部方面の眞東の方向にあって、中國人たち *khatalyan* が黄河 *qarānūn* から女眞海 *darya-yi Juria* まで伸ばした長城 *diwār* の諸地域、及び女眞の國 *vilyat-i Juria* に近い。その地に近接する諸地方は、イキレス部族の舊牧地「カラアルジン・

ハント Qalā'in-ālt の地、及びウルクタイ河の地方である。
(*ibid.*, p. 207)

② 前註参照。

③ この人物は、他には見えず、如何なる血縁關係にあるのかわからぬ。

④ 那珂前掲書、三一九頁。

⑤ 那珂前掲書、三四一頁。津田左右吉「金代北邊考」(『滿鮮地理歴史報告』第四號、一九一四年)一六頁。箭内前掲書、五九一頁。和田清「兀良哈三衛に關する研究(一)」(『東亞史研究』蒙古篇、東洋文庫、一九五九所收)一八一頁など。

⑥ Rashid / E. Blochet, *Djami el-Tawrikh par Fadl Allah Rashid ed-Din*, Tome II, Leyden-London, 1911, p. 131.

⑦ 『集史』・『聖武親征錄』とよめ二二八年戊寅の條に記してゐるが、この軍事行動は『秘史』の二二〇七年が正し。

⑧ C. Dawson (ed.): *The Mongol Mission, The Makers of Christendom Series*, New York, 1955. (護雅夫譯『カルビニ・ルンルク中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、一九六五年)七五頁。

カルビニ一行は、「黒キタイ人の土地」を出立して、「餘り大きくない一つの湖」を「左手に見おこつて」東行し、シユチの長子オルダが住む國に至つた。その國は「澤山の河川があり、これら兩岸には森林がしげつて」いて、オルダの「父の本營」つまり宮廷がそこにあつて、その夫人の一人がこれを支配してゐたという。護雅夫氏によれば、右の「湖」とは「タルンガタイ地方のアラ・クル湖に比定されるといふから(前掲書、一一二

— 一三頁、註五七)、その東方のオルダの國とはイルティシユ方面に相當するわけである。事實、カルビニの描寫はイルティシユ地方の景觀によく符合している。その上、オルダの「父の本營」があつたというのだから、この地方がイルティシユ流域であることは、ほぼ間違いないであらう。

⑨ Rashid / Blochet, pp. 178—179.

⑩ *ibid.*, p. 179.

クシラの六〇七年、シャバン月にあたる qunā yil su nawaチ羊の年の秋、チンギス・ハンがハタイの國へと出御した時、チヤガタイは、ウゲデイ、トゥルイ(明らかにシユチの誤り)とトフド、五つの城郭都市、雲内 Ün-Ür、東斡 Tünk-Chänk、武州 Fu-Chiür、朔州 Süg-Chiür、豊州 Funk-Chin を捕獲した。

⑪ *The History of the World Conqueror by Juvaini*, tr. by A. J. Boyle, 2 vols. Manchester 1958, p. 29, p. 43, p. 184.

⑫ *ibid.*, p. 184, *ibid.*, p. 43; Mirzā Muhammad Qazvīni, ed., *The Tarikh-i-Jahan-Gushā of 'Alā 'ud-Dīn 'Atā-Malik-i-Juvayni*, 3 vols., London, 1912 1916, and 1937, vol. 1, p. 31.

⑬ ホンク Qobaq はソリオによれば、ヤール河東方の「ボク Qobog なる一流びある川」(Boyle, p. 43, fn. 14; P. Pelliot: *Les Mongols et la Popauté*, Revue de l'Orient Chrétien, XXIV, 1924, pp. 206—207, n. 2.

⑭ Juvaini / Boyle, p. 184.

- ③⑤ *ibid.*, p. 63.
- ③⑥ 王國維『長春真人西遊記校注』上、三二葉 b。
- ③⑦ Rashid / Blochet, p. 184.
- ③⑧ 『秘史』二〇六節(卷八)。村上譯注書 2、四〇六頁。
- ③⑨ 同右、二〇五節(卷八)。村上譯注書 2、四〇二頁。
- ④⑩ この點に關して、佐藤長氏から貴重な御示唆をいただいた。
- ④⑪ 『秘史』二六九節(卷一二)。村上譯注書 3、二八七頁。

The Fundamental Structure of the Mongol Empire : On the Enfeoffment of the Kinsmen of Činggis-qan

Sugiyama Masa'aki

At the beginning of the thirteenth century, Činggis-qan, who had unified Mongolia, gave each of his sons and younger brothers tribes composed of several thousand-dwelling units and formed *uluses*. The various *uluses* of these kinsmen, while carrying the burden of the explosive expansion of the Mongols thereafter, also formed a massive political federation under the unifying command of the Great Qa'an. The so-called Mongol Empire is nothing other than this collective body through which the kinsmen of Činggis-qan carried out their divided rule, and its origins go back to the enfeoffment of his kinsmen at its inquration.

This problem which, in the unfolding of the history of the Mongol Empire, stands at its point of departure, has been much researched and discussed heretofore. However, not all aspects of the problem have been sufficiently clarified. Here I would like to present a preliminary essay in which I investigate a series of problems relating to the enfeoffment of Činggis-qan's kinsmen in as total a fashion as possible.

The period in which the enfeoffments were carried out is thought to have been 1207-11, the period just prior to the commencement of the subjugation of the surrounding regions. The persons who received enfeoffments were his three sons Jöči, Čaγatai and Ögödei, and his three younger brothers, Jöči-Qasar, Qači'un and Otčigin. At that time, the number of tribes assigned to his three sons and three younger brothers was the same. The *uluses* of his three sons were positioned along the Altai on the western frontier of Mongolia, and the *uluses* of his three younger brothers were positioned along the Hsing-an Ling on the eastern frontier.

The equality and geographical antipodism of the eastern and western groups show that, in the period in which the Mongol state came into

being, the influence of each *ulus*, in terms of both actual power and geography, was exactly parallel. It is thought that this was the reason why, in the age of the Mongol Empire, the various *uluses* of the sons in the west were called "right-wing princes" and the various *uluses* of the younger brothers in the east were called "left-wing princes".

On both the east and west edges of the early Mongol Kingdom, which for the time being had been brought to completion through the enfeoffment of Cinggis-qan's kinsmen, were positioned the six *uluses* of the kinsmen. Between them stood the central *ulus* (Qol-un ulus) of which Činggis-qan himself held control. With an Imperial Guard (Kešigtei) of 10,000 men at its center it was further divided into a left guard and a right guard.

Although this state structure underwent considerable change due to the extraordinary expansion of the Mongols thereafter, it remained the fundamental framework of the Mongol Empire, and it is likely that it was the proto-type of the several states in the Mongol line which rose and fell in Eurasia during the thirteenth and fourteenth centuries and thereafter.